

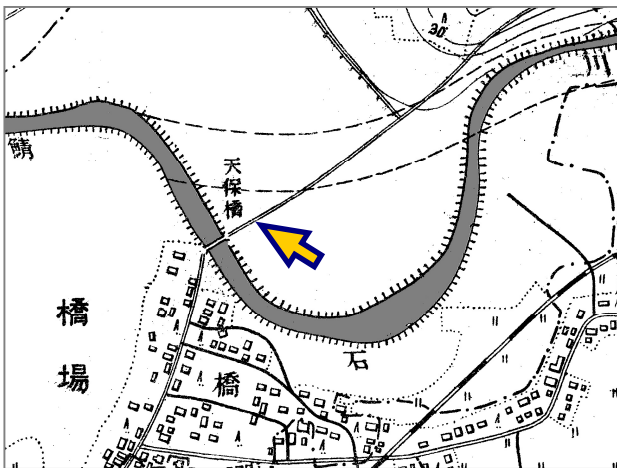
# 「柏崎の橋」

## 1 4 天保橋（橋場町）

松波2丁目と橋場を結ぶ「開運橋」は、古くは「天保橋」と呼ばれる橋であった。その橋は天保年間（1830～1843）に作られたので「天保橋」という名前がついた。また立派な橋ができたので、この地を「橋場」と呼ぶようになったという。

橋場は柏崎と長岡を結ぶ長岡街道が通っていた。江戸時代、この道は三国街道と北国街道を結ぶ重要な脇街道であり、天保橋ができるまで人々は渡し舟で鯖石川を渡った。ここより海に近い悪田の渡し（安政橋付近）を使って柏崎と荒浜・椎谷方面を行き来する人も、波風が荒い日は橋場の渡しを利用した。この渡し舟の不便を解消するため、品田嘉兵衛という武士が仲間呼びかけて天保橋を架けた、という伝説も残る。

笹川芳三氏が記した「天保橋事情」には、明治7年当時、天保橋を渡るのに3厘（1厘は1銭の1/10）の通行料が必要、とある。ここには当時の天保橋について「長さ27間（約49m）、幅2間（約3.6m）、見積もりではひと月平均60名が



天保橋  
（昭和30年12月測図1万分の1地図より）  
塗りつぶしてあるのが鯖石川  
橋名付近の点線が河川改修後の河道



開運橋とクリーンセンター  
鯖石川改修記念公園より撮影

通行、<sup>わたしもり</sup>渡し守をしていた人達が交代で橋守をする。」などとする古文書も紹介されている。橋を架ける費用については周辺28村で組合をつくって分担したとあるが、橋場村は負担の割合がとりわけ高く、責任を引き受けるために村人の懸命な努力があったことが想像される。また、かつての天保橋は板を渡しただけのとても危険なものだったが、橋場の旦那様が寄付して欄干を設置したという。

古老によれば、橋は流されたりして（自分が知るだけで）4回架け替えられたとのことである。昭和30年以降、幾度も鯖石川の河川改修工事が行われ川筋が直線化された。天保橋が架かっていた流れも埋め立てられ、新しい河道に橋が架け替えられた。新しい橋は昭和35年12月の竣工。その際、中田に同じ「天保橋」があるため「開運橋」と改名された。現在、橋の付近は真新しい住宅が立ち並び、天保橋や古い河道の痕跡を探すことは難しい。渡し場の跡という痕も残っていない。

- 参考にした本  
西中通のあゆみ（224 ㊦） 柏崎市西中通公民館  
柏崎市の遺跡 VII（224 K ㊦ 29） 柏崎市教育委員会  
新潟県歴史の道調査報告書 5（290 N ㊦） 新潟県教育委員会  
柏崎市伝説集（388 K ㊦） 柏崎市教育委員会  
柏崎文庫（080 ㊦） 関甲子次郎 著